

「自然石パノラマ魚道」は流れが浅いと、野鳥が水中の鮎を見つけて飛来し捕食するため「鮎を守る魚道」が次の課題となった。勾配が少し急な河床では、玉石が横一列に並び連続して階段を形成している箇所がある。大木で玉石が運ばれて並ぶ不思議な自然の造形だ。周辺の水深は20センチ程度。各種実験で得た、鮎が活発に行動する深さで、石の下流側は白く泡立っていた。

この玉石の階段を丸めて扇形の魚道とし、段々のプールは柵田をイメージした。共同開発に携わ



上れば良いってもんじゃないよ

山辰組 社長 馬淵和三

れた木曾川上流河川事務所の人が、柵田の生物多様性に願いを込めて「柵田式魚道」と命名された。この魚道に並べた石の間の不揃いな隙間は多様な流れを生んだ。生き物は体力に応じた箇所を選び魚道内を自由に移動した。石の間を通った水は下のプール内へ泡と共に流下する。泡は直ぐに水面に浮上するので水中は透き通り、鮎に良好だ。水面の白い泡が鮎を隠し野鳥の飛来が殆ど無い魚道となった。

私は鮎が上る季節に魚道を巡る。従来型魚道では堤防の車中から魚道に

いる野鳥の動きを見て「鮎はここまで来たな」と解ったが、柵田式魚道では胴長靴を履き、魚道まで行って確認する事となった。この魚道は「鮎を守る魚道」となり、他日本の魚種や水棲生物も移動し易く評判となった。しかし、この新型魚道の普及に必要な「なぜ上り易いか」との問いに対し、定量的・理論的な裏付けに基づく説明がで

きなかった。「上れば良いってもんじゃないよ」の言葉に應えるべく、思い

もしなかった岐阜大学大学院博士課程の門を叩く事に。49歳の時であった。